



この研究は、運動機能の中

それぞれ 10 名につい

て、左手指の複雑連続運動を 5 段階の速度で行わせ、その際の機能的 MRI を撮像しました。速度はメトロノームに追従する受動的な外的ペースと、選んだ主観的速度を保つ能動的な自己ペースの 2 種類を試みました。

若年健常人の自己ペース運動時には補足運動野—右被殻—右視床—右 1 次感覚運動野に強い機能連関が認められました。一方老年健常人の自己ペース運動時には補足運動野—右被殻、外的ペース運動時には右運動前野—右 1 次感覚運動野の機能連関は低下しますが、補足運動野—右運動前野間の機能連関は増加していました。

この成績は加齢に r t 中核とな u 回路活動は低下す u もの、その他の運動関連領域

脳の違った部分を使うことにより、年をとっても運動機能を維持できる

